



# 千一夜物語 IV

佐藤正彰 訳

世界古典文学全集

34

筑摩書房

千一夜物語 IV

世界古典文学全集 第34卷

昭和45年3月30日第一刷発行

訳者 佐藤正彰

発行者 竹之内静雄

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2-8  
振替東京 4123 電話 (291)7651  
郵便番号 101-91

(分類) 0397 (製品) 20334 (出版社) 4604

目次

千一夜物語

佐藤正彰訳

5

(第八百八十二夜から第一千一夜と大団円まで)

解説

佐藤正彰

545



千  
一  
夜  
物  
語  
Ⅳ



## ① ヌレンナハール姫と美しい魔女の物語

おお幸多き王様、わたくしの聞き及びましたところでは、時の古え、時代と世々の過ぎし昔、武勇に富んだ権勢ある一人の王がおられて、寛仁者アッラーより、月のような三人の男子を授けられました。長男はアリ、次男はハサン、末子はフサインと申しました。そしてこの三人の王子は、伯父君の娘ヌレンナハール姫と一緒に、父王の御殿で育てられました。この姫は父君も母君も亡くなった孤児で、美しさの点でも、才智の点でも、魅力の点でも、完全の点でも、人間の娘の間で並ぶものない方でした。眼は怯えた羚羊<sup>かぎやぎ</sup>に、口は薔薇の花冠と真珠に、頬は水仙とアネモネに、腰は詞利<sup>しり</sup>鞠<sup>まき</sup>の木の新やかな若枝に、似ています。そして姫は、叔父君の三人の幼い王子と一緒に、共に遊び、共に食ひ、共に眠りつつ、あらゆる喜びと幸いの裡に、長じてゆきました。

ところで、ヌレンナハールの叔父君の帝王は、姫が妙齡に達した晩には、誰か近隣の王のなかの王子と結婚させようと、常々心の中で思っておられました。ところが、いよいよ姫が成人の面衣を着けますと、御自分の子の三人の王子が、いずれ劣らぬ愛情で熱烈に姫を慕って、おのおの心中で姫をかち得て我がものにしようと思んでいるのに、やがてお気づきになりました。そこで大いに御心を悩まし、お困りになって、考えました、「もし己が他の二人を差しおいて、特に従兄<sup>じゆうけい</sup>のうち一人に、ヌレンナハール姫を授ければ、その二人は快よからず、わが決定に不平を唱えよう。わが心は二人が悲しみ、傷つけられるのを見るに忍びまい。といって、姫をどこか他処の王子と結婚させれば、わが三児は悲嘆と苦悩の極に達し、彼らの魂はそのため暗くされ、痛みを覚えるであろう。そのような場合には、彼らは絶望のあまり自害したり、われらの住居のがれて、遠くに戦争などを求めたりしないと限らぬ。まことにこの

問題は、不安と危険に満ち、解決はすこぶる容易ならぬわい。」そして帝王はこの件について長い間考えはじめましたが、突然頭をあげて叫びなさいました、「アッラーにかけて、問題は解決した。」そして直ちに三人の王子、アリとハサンとフサインをお召しになって、一同に仰しやいました、「おおわが子たちよ、お前たちはわが眼から見るに、長所は全く同じであつて、余としては、お前たちのうち他の兄弟を斥けて、特に一人を選んで、これにヌレンナハール姫を授けるなどということは、決心がつかぬ。といつて、姫をお前たち三人と同時に結婚させるわけにもまいらぬ。されば余は、お前たちのうち一人をも傷つけることなく、等しく皆を満足させ、お前たちの間に和合と親愛を保つに都合よき、一策を案じた。それゆえ、お前たち、よくわが言葉に耳傾けて、これから聞くことを実行するように致せよ。さて、わが心の決した案とは次のようなものだ。即ち、お前たちはそれぞれ相異なる国に旅に出かけて、自から最も稀代にして尋常ならぬと思ふ珍稀な品を、余の許に持ち帰れよ。余は、最も驚くべき靈宝を持つて帰った者に、お前たちの伯父君の娘たる姫を授けよう。されば、もしお前たちが、余の持ち出すこの案を実行するに同意するならば、お前たちの旅と、お前たちの選ぶ品を買いとるのに必要なだけの金子を、何時なりと取らせよう。」

ところで三人の王子は、かねがねいつも従順で恭しい息子でありましたので、一同口を揃えてこの父王の計画に賛成しましたが、めいめい自分こそは、一番すばらしい珍稀な品を持ち帰って、従妹ヌレンナハールの夫になれるだろうと確信していたのです。それで帝王は一同のそういう気組みを見て、三人を宝蔵に連れて行つて、望むだけの黄金の袋を与

(1) ガランでは「アフメド王子と仙女パリ・パヌーの物語」、パートンでは「アフメド王子と仙女パリ・パヌー」となっている。

(2) Ali, Hassan, Hosein — ガランでも、パートンでも、長男が Housa-in (Husayn), 次男が Ali, 末子が Ahmed (Ahmad) となっている。

(3) Nourenahar — ガランでは Nourounihar (アラビア語で「光」の意)、パートンでは Nur al-Nihar (昼間の光) とある。



えました。そして外国にあまり長く滞在しないようにと注意した上で、めいめいに接吻し、頭上に祝福を祈ってやりながら、別れを告げました。三人は旅の商人に身をやつして、それぞれただ一人の奴隷を連れて、血統正しい駿馬に乗って、アッラーの平安の裡に、己が住居を出ました。

三人は一緒に旅を始めて、ちょうど道が三筋に分れて居る場所にある隊商宿まで赴きました。そこで、奴隷たちの仕度した御馳走を満喫してから、旅の期間是一年きっかり、それより一日も多くな、一日も少なくなることしよう、話がまとまりました。そして帰国の節は、この同じ隊商宿に落ち合う約束をし、最初に着いた者は他の兄弟を待つて、三人打ち揃って父上帝王の御前に罷り出られるようにするという条件にしました。それで食事を終つて、手を洗い、抱擁しあつて、互いに無事の帰還を祈つてから、再び馬に乗つて、おのおの違つた道をとりました。

さて、三人兄弟のうちの長男アリ王子は、野山を越え、草原と沙漠を越えて三箇月の旅の末、インド海岸の一国に着きました。それはビスシャンガール王国でした。王子は外国商人用の大きな隊商宿に泊りに行つて、自分と奴隷のために、部屋をなかくて一番広く一番清潔な一室をとりました。そして旅の疲れを休めるとすぐに、外に出て町の様子を調べると、それは三つの城壁に囲まれ、四方の広さのおの二パラサングの町でした。早速市場のほうに向つてみると、中央の広場に達する幾条も大きな街路があつて、広場には中央に美しい大理石の泉水があり、なかなか見事なものでした。それらの街路はすべて、円屋根で覆われて涼しく、上部に窓を明けて明るくなつております。その街筋はそれぞれ違つた種類の商人たちが占めておりますが、しかしそれぞれ同業者仲間が集つています。それというのは、或る街には、インドの上等な切れ地とか、動物や風景や森や庭や花を描いた模様をついた、鮮やかで清らかな色を塗つた布とか、ベルシアの錦とか、シナの絹などしか見られないし、一方他の街には、美しい磁器とか、よく光つた陶器とか、形美しい容器とか、細工を施した盆とか、あらゆる大きさの茶碗などが見られます。又、そのそばの街には、一度畳めば掌中にはいってしまふくらい、薄く

柔かい布地でできて居るカシミアの大きな肩掛とか、礼拝用の絨緞とか、あらゆる裁ち方の絨緞などが見られるし、更に進んだ左側には、鋼鉄の扉で両側を閉めた寶石商と貴金屬商の街が、驚くばかり夥しい宝玉、金剛石、金銀製品で輝いております。そして王子は、これらの光まばゆい市場を歩きまわつていて、店先に飾つて居るインド人男女の群のなかで、下層民の女たちさえも、首飾り、腕輪をつけ、又、脚や足や耳や鼻にまで飾りを帯びているのに気づいて、喫驚しました。そして女の肌色が白ければ白いほど、その身分は高く、その宝石類は値高く煌々かなものでした、もつとも他の女たちの黒い肌色は、宝玉類の光彩と真珠の白さを際立たせるといふ取り柄があるのでしたけれども。

けれどもとりわけアリ王子を悦ばせたのは、薔薇と素馨を売つて居る大勢の少年と、少年たちが花を勧める好ましい様子で、少年たちが街々にいつも密集して居る群衆の間を分けてゆく賑みなさでした。王子はインド人の特別な花好きには感心しました。彼らは、髪にも手にも、到るところに花をつけるばかりか、耳や鼻孔にまでつけるほど、甚だしいものがあつます。それに店という店には全部、これらの薔薇と素馨を山盛りにした花瓶が備えつけられていて、市場中がその香りに満ち、さながら吊り花壇のなかを散歩するようございました。

アリ王子はこうして、これらすべての美しい物を眺めて眼を楽しませただげく、少しく休みたくなつて、折から店先に坐つて、身振りと微笑で、はいつて坐るようにする商人の招き、応じることになりました。王子がはいるとすぐに、商人は上席に招じ、茶菓をすすめ、何ひとつ無駄な、或いは無駄な問もかけず、強いて買物を勧めるようなことをしません。それほどの商人は鄭重を極め、よい躰けを授けられていました。そこでアリ王子はこうしてすつかり感心して、心に思ひました。「何という愛すべき国だろう。何という気持のよい住民だろう。」そこで即刻、それほど王子はこの商人の礼儀と行儀作法に心を惹かれたわけですが、この店にあるもの全部を買取つてやろうかと思ひました。しかし考えてみると、これら全部の商品を買つても始末に困るので、さ

しあたり、この商人といつそう深く近づきになることで我慢しました。

さて王子が商人と雑談を交わし、インド人の風俗習慣について質問をしていると、ふと店の前に、一人の競売人が、六尺四方ほどの小さな絨緞を腕に持って、通りかかるのが見えました。そしてその競売人は突然立ちどまって、頭を右に廻して叫びました、「おおお市場の衆よ、お買い手の方々よ、お買いの方に御損はござらぬ。この絨緞、金貨三万ディナール。お買いの方に御損はござらぬ。」

この競売を聞いて、アリ王子は思いました、「何と驚いた国だ。礼拝用の絨緞が金貨三万ディナールとは、未だかつてこんな話を聞いたことはない。ひょっとしたら、あの競売屋は冗談をいつているのかな。」次に競売人が、自信ありげな様子で、こちらを向いて、叫びを繰り返しているのを見て、王子はこちらに來いと合図をして、その絨緞をもつと間近かに見せてくれと言いました。すると競売人は一言も言わずに、その絨緞を掲げました。アリ王子は永い間それを調べて、最後に言いました、「おお競売屋よ、アッラーにかけて、どうもこの礼拝用の絨緞が、どうしてお前の言い値のような無茶な値段だけのことがあるのか、わかりかねるが。」すると競売人は微笑して言いました、「おおわが御主人様この値段に早まってお驚きになってはなりません。この品の真の値いに比べれば、これは決して法外な値段ではございません。それに、実は私はこの値段を金貨四万ディナールまで競り上げた上で、その金額を現金で払ってくれる者にしか、この絨緞を渡してはならぬと命じられていることを申し上げますれば、お驚きは更に甚だしきものがござりましょう。」アリ王子は叫びました、「なるほど、おお競売屋よ、アッラーにかけて、この絨緞がそのような値段に値いするとあらば、何か私の知らない、又はわからない点で、定めしすばらしいものがあるにちがいない。」

——ここまで話したとき、シャハラザードは朝の光が射してくるのを見て、つつましく、口をつぐんだ。

彼女は言った。

けれども第八八夜になると

すると競売人は言いました、「まさに仰せの通りです、殿よ。お聞き下さい、事実、この絨緞には見えざる靈験が授けられていて、この上に坐れば、すぐに行きたいところに運ばれてゆき、しかも片目を閉じ、片目を開ける暇もないほどの速さで行けるのでございます。そしてどのような障害物も、その進行を阻むことはできません。それというのは、この絨緞のゆくところ、暴風雨は遠ざかり、雷雨は逃げ、山々と城壁は開らき、堅牢この上なき錠も、そのこと自体によって、無効で空しきものと相成ります。これが、おおわが殿よ、この礼拝用絨緞の見えざる靈験でございます。」

そして競売人はこう語り終ると、それ以上一言も付け加えずに、立ち去るかのようにその絨緞を畳みはじめました。そのときアリ王子は悦びの極に達して叫びました、「おお祝福の競売人よ、もしこの絨緞に真に、お前の言葉が今聞かせるような靈験ありとすれば、私はお前の要求する金貨四万ディナールは勿論、更に手数料として、お前に一千ディナールを謝礼に支払ってやろう。ただし、私は自分の目で見、自分の手で触れてみなければならぬ。」すると競売人は、心を動かす様子なく、答えました、「その四万ディナールはどこにありますか、おおわが御主人様。又惜しみなく私に約束して下さいそのおまけの千ディナールというのは、どこにございましょう。」アリ王子は答えました、「私が奴隷と一緒に泊

(1) Bishangar——ガランは Bishagar としてインドの同名帝国の首府たる大都市と注するが、バートンは Bishangarth としガランのは全くの誤称と注する。十二世紀から十六世紀にかけて南インドを支配した、マドラス地区にあった大都市らしい。

(2) 前出、一バラサングは約五キロ。

っている、大きな商人宿に置いてある。一度度私が見て、触わつたらば、その宿にお前と一緒に行って、勘定をしてあげよう。」競売人は答えました、「わが頭上と眼の上に。あの大きな商人宿は大分遠うございますから、私たちは歩いて参るよりも、この絨絨に乗って行くほうがずっと早く着くでございます。」そしてその店の主人のほうを向いて、競売人は言いました、「ちよつと御免を蒙ります。」そして店の奥に行つて、そこに絨絨を展べて、王子にその上に坐るように願いました。それから自分もそのそばに坐つて、王子に言いました、「おおわが殿よ、お心の中で、あなたのお宿の、御自身おいでの場所に、運ばれたいという御所望を御念じ下さい。」そこでアリ王子は心中にその所望を念じました。すると、あのように懇懇に迎え入れてくれた店主に、暇を告げる暇もなく、王子はもう自分の部屋に運ばれていました、揺れもせず、不快もなく、坐つたままの状態で、いったい空中を渡つたのか地下を通つたのか、何もわからずに。そして競売人は依然王子のそばに、微笑を浮べて、満足げにおります。奴隷は早くも王子の手の間に駆けつけて、御用を承るうとしています。

絨絨の靈験をこうして確かに知ると、アリ王子はその奴隷に申しつきました、「この祝福された方に、即刻、千ディナル入りの財布四十を教え、又一千ディナルの財布一つを、その別の手にお渡し申せ。」奴隷はその命令を果しました。すると競売人は絨絨をアリ王子の許に残して、王子に「よいお買物をなさいました、おおわが御主人様、」と言ひおいて、自分の道に立ち去りました。

アリ王子はこうして魔法の絨絨の持ち主となると、このビスシャンガールの都と王国に着くと早々、このような稀代の珍品を見つけたことを思つて、満足と悦びの極に達しました。王子は叫びました、「占めた、かたじけない、今や俺は苦もなく、わが旅の目的を達したぞ。これで弟たちに対する勝は疑いない。伯父上の娘ヌレンナハール姫の夫になるのは、この俺だらうさ。それに、この靈験ある絨絨の世にも稀な仕業を皆にししかとわからせてやったら、父上のお悦びと弟たちの驚きはさぞかし

であらう。なぜというに、弟たちの運命がどんなに恵まれようと、この品に遠くも近くも及ぶことのできる品物を、首尾よく見つけるなどということは、到底不可能なことだ。」こう思いながら、王子は独りごとを言いました、「だが要するに、今は俺にとっては距離などもう問題にならないのだから、このまますぐ故国に帰つたらどんなものか。」次に、つくづく考えてみると、弟たちと申し合わせた一年の期間のことを思い出して、今すぐ出発すると、あの落ち合う場所になっている三本道のところの隊商宿で、あまり永い間待たなければならぬおそれがあることがわかりました。それで独りごとを言いました、「ただ待つために待つのなら、あの三本道の淋しい隊商宿でよいか、ここで時を過ごすほうが好ましい。それではこの見事な国で気晴らしをし、かたがた、自分の知らないことを学ぶとしよう。」そしてその翌日から、ビスシャンガールの町中の市場見物と散歩をまた始めたのでございました。

こうして王子は、インドのこの国の本当に変わった諸方の名所を、探ることができました。いろいろ珍らしい事のなかで、王子は例えば、全部青銅で作つた偶像の寺を見ました。その寺には、露台の上に建つた、高さ五十腕尺ばかりで、大そう色鮮やかな洗練された趣味の絵画が三列刻まれ、着色されている円蓋がついておりました。そして寺全体が、精巧な細工の薄浮彫と、組合わせた模様で飾られています。そして寺は、薔薇その他、匂いもよく見ても美しい花の植つた広い庭のまん中にあります。けれども、この偶像の寺——願わくは、それらの偶像などは打ち壊され、打ち砕かれますように。——その主な見物と申せば、それは等身大の金無垢の像一基で、その両眼は二つの動く紅玉でできているのですが、それが巧妙を極めてあんなにきれいな、さながら生ける眼のようで、前にいる人のあらゆる動作を追つて眺めるように見えるのでした。そして朝夕、その偶像の祭司は寺で、彼らの異端の礼拝の儀式を営み、そのあとにいろいろの遊戯や、奏楽や、軽業師の曲芸や、歌妓の音曲や、舞妓の舞いや、祝祭などを行なうのでした。それにこの祭司たちは、巡礼の群が最も遠い国々の奥から、引きも切らず持つてくる供物だけで、暮

らしているのであります。

又アリ王子は、ビスシャンガール滞在中、この国で毎年行なわれる大祭を見物することができました。それには全国の代官と軍の首長と、偶像の祭司であり、異端宗教の首長である波羅門たちと、無数の民衆の群が参列するのです。この全衆は広々とした大平原に集まり、そこには国王と廷臣を容れるおそろしく高い建物が聳えていて、それは八十本の柱で支えられ、外側には風景、鳥獸、虫、蠅や蚊などまで、すべてが実物大に描かれています。その大建築のそばに、非常に大きな面積の台が三つ四つあって、そこに民衆が坐ります。そしてこれら全部の建物は、廻転するようになっていて、刻々に表面と装飾を変えつつ、千変万化させられてゆくという、不思議なものでした。見世物はまずこの上なく上手な曲芸師の軽業と、手品師の手品と、修道僧の舞いで始まります。次には、千頭の象が、美々しく装いを凝らし、それぞれ金色の木材で作った四角い塔を載せ、その塔にはそれぞれ道化師と楽器を弾く女たちを乗せて、戦闘隊形をとって互いにあまり距離を置かずに並んで、進み出るのが見られます。それらの象の鼻と耳は、朱と辰砂で塗られ、牙は全部金色に染められ、体軀には、或いは恐ろしく或いは奇怪に振れゆがんでいる幾千もの手足を持った画像が、鮮やかな色彩で描かれています。そしてこの物凄い一群が見物人の前に着くと、塔を載せていません、千頭のなかで一番大きい二頭の象が、列から離れて、台を連れて出来ている輪のまん中まで進み出ました。そしてそのうちの二頭は、楽の音につれて、或いは両足で、或いは両手で、立ち上がりながら、踊り出しました。それから、その象は、まっ直ぐに突き立てた杭の天辺まで巧みに攀じのぼって、その端に両手両足を同時に載せながら、楽器の節奏に合わせて、鼻で空を打ち、耳を翻えし、頭を四方に動かかしはじめると、一方二番目の象は、中央を支柱で支えて水平に置いた別な杭の端に棲つて、反対の端に載せた途方もなく大きな巨石で釣合いをとりながら、或いは上がり、或いは下がりつつ、平均をとって揺れ、その間、頭でもって音楽の拍子を取るのです。

アリ王子はこうしたすべてや、その外いろいろな事に驚嘆させられました。そこで、ますます募りゆく興味を覚えつつ、自分の国の人々とはこんなにもちがうこのインド人たちの風習を研究しはじめ、散歩と、商人やこの王国の名士たちへの訪問を続けました。けれどもやがて、王子は絶えず従妹ヌレンナハール恋しさに悩んでいたのも、まだ一年は経たないにも拘わらず、もうこれ以上自分の国から遠ざかっていられなくなり、従妹とこんなに遠い距離を隔てていないと感じられれば、もっと仕合せな気持になろうと信じて、インドを去って自分の思いの対象に近づこうと思ひ定めました。そこで、奴隷が部屋代を門番に支払った上で、王子は奴隷と一緒に魔法の絨緞の上に坐り、三本道の隊商宿に運ばれたいと心をこめて念じながら、思いを凝らしました。そして、沈思しようとしてちよっと閉じた眼を開けますと、既に例の隊商宿に着いているのを認めました。そこで王子は絨緞から立ち上がって、商人の着物を着た姿で隊商宿にはいり、そこで静かに弟たちの戻りを待つことに致しました。彼のほうはこのようでございます。

三人兄弟の二番目のハサン王子はと申しますと、次のようでございます。

王子は道に就くとすぐに、ベルシアに向う隊商に出会いました。ここで王子はこの隊商に加わって、野山を越え、沙漠と草原を越えて、長い旅を続けた後、王子は一行と共にベルシアの王国の都に着きました。それはシーラーズの町です。そこで王子は、仲よくなった隊商の商人たちから教わって、町の大きな隊商宿に投宿しました。そして到着の翌日から、昨日までの旅の道連れたちが柵を開らき、商品を並べている間に、王子は見るべきものを見ようと、いそいで外に出ました。そして王子は、

(1) 一腕尺は約〇・五メートル

(2) Schiraz (Chiraz) — 現在のイランの南部シーラーズ大平原にある ↓

この国でバジスターンと呼んでいる市場に案内させましたが、ここでは宝石、宝玉、錦、美しい絹織物、上等な布地など、あらゆる貴重な商品売っておりました。王子は店々で見つける美しい品の、おびたらしい量に驚嘆しながら、バジスターンのなかを散歩しはじめました。到るところに、仲買人と競売人が四方八方に往来し、美しい切れ地や、美しい絨緞や、その他美しい品々を、競売にかけて呼ばわっているのが見られました。

ところで、これらすべての忙しい人々のなかに、ハサン王子は、長さ約一尺、太さ一寸ばかりの象牙の筒を持って、一人の男を見かけたのでした。

——ここまで話した時、シャハラザードは朝の光が射してくるのを見て、つつましく、口をつぐんだ。

### けれども第八百九夜になると

彼女は言った。

そしてその男は、ほかの競売人や仲買人みたいに、がつがつしたあわただしい様子を見ないで、その象牙の筒を、さながら国王が自分の国の王笏を持つみたいに、いやもつと威風堂々と、持ちながら、ゆっくりと重々しく、歩きまわっておりました。それでハサン王子は思いました、「あの仲買人は何か信用できそうな気がするな。」そして王子が、そんなに恭しく捧げ持っている筒を見せてもらおうと、そちらに向って行きかけたら、そのときその男が呼ばれるのが聞えました。しかし非常に誇らしげな、臆する色もない大音声で言うのでした、「おお買い手の衆よ、お買いの方に御損はござらぬ。この象牙の筒、金貨三万ディナール。これを作った仁は既に亡く、もはや二度と姿を見せることはない。これは象牙の筒じゃ。これはその見せるところを見せます。お買いの方に御

損はござらぬ。見んと欲する者は、見るを得ましようぞ。これはその見せるところを見せます。これは象牙の筒じゃ。」

この呼び声を聞くと、ハサン王子はすでに一步踏み出したところでしたが、驚いて退き、背を凭せていた店の主人のほうに向いて、これに言いました、「御身の上なるアッラーにかけて、おおわが御主人よ、いったいあの小さな筒にこんな法外な値段を吹っかけるあの男は、気がたしかないのでしょいか。それとも全く分別を失っているのでしょうか。或いはただふざけてあんなことを言っているのでしょうかねえ。」店主は答えました、「アッラーにかけて、おおわが御主人様、あの男はわれわれの競売人きつての律儀で賢い男なことは、私が保証できます。商人たちので、一番多くあの男に頼んでいます。あの男の分別も保証します、まあ今朝から分別をなくしたとでもいうならとにかく。だがそんなことは考えられません。ですから、あの男がその値をつけるというなら、あの筒には三万ディナールの値打がある、いやそれより以上の値打があるものと、思わなければなりません。どこか表に現われないところに、それだけの値打があるにちがいありません。それにもしお望みなら、あの男をここに呼んでさしあげましょう。御自身で訊ねてごらん下さい。では私の店に上がってお坐りになり、ちよつとお休み下さい。」

そこでハサン王子はこの商人の親切な申し出を承知しました。王子が坐つたと思うと、競売人は自分の名を呼ばれたので、店に近づいてきました。すると商人は彼に言いました、「おお競売屋何某さん、実はここにおいでのお客様が、この小さな象牙の筒に三万金の言い値をつけなされるの聞いて、大へん驚いていらつしやる。この私だって、もしあなたが元来真正直な仁だということを知らなかったら、やっぱり驚いたことでしょうよ。ですから、あなたからこの殿様に直接返事をして、あなたに対する好ましくない疑念を晴らしておあげなさい。」すると競売人はハサン王子のほうに向いて、言いました、「まことに、おおわが御主人様、見たことのない方には、お疑いも無理はござんせん。しかし御覽に

なつた眺には、もはやお疑いになりませうまい。この筒の値段段につきましても、三万ディナールというのは、最初の附け値でございまして、実は四万ディナールです。それ以下で手放してはならぬ、しかもそれを現金で払う人にしか譲つてはならぬと、命じられていたのでございませう。」ハサン王子は言いました、「いかにも私はお前の言葉をそのまま信じたと思う、おお競売屋よ。だがそれにしても、この筒はいかなる点でどのように珍重に値いし、どういふ特異な点で注目を促すのか、知らせてもらわなければならぬ。」すると競売人は言いました、「お聞き下され、おおわが御主人様、もしあなたがこの水晶のはまっています端のほうから、この筒をお覗きになれば、見たいと思ひなされるものは何なりと、立ちどころに叶えられて、見ることができません。」ハサン王子は言いました、「お前の言うことが本当ならば、お祝福の競売人よ、私はお前の求めだけの代金を払つてあげるばかりか、更に手数料として、一千ディナールをお前に進呈しよう。」そして言い添えました、「いそいで教えてもらいたい、どの端を私の眼にあてなければならぬのかね。」競売人はその端を示しました。そこで王子は、ヌレンナハール姫を見たいと念じながら、覗いて見ました。すると突然、姫の姿が見えました。浴場の浴槽に坐つて、姫のお化粧をしている奴隷たちの手の間にいる姫の姿が。姫は水と戯れながら笑い、自分の手にする鏡を見ております。このように美しく、又このように間近かに、姫を見て、ハサン王子は感動の極、大きな叫び声をあげずにはいられず、思わず筒を手から取り落しそうになりました。

こうしてこの筒こそは世界にある最も不思議な品であるという証拠を得、王子は、たとえこの旅を十年続けようとして、全世界を駆けめぐらうと旅から持ち帰るべきこのような珍品には、決して出会うことはあるまいと信じて、これを買うのに一瞬も躊躇しませんでした。そこで競売人についてくるように、合図をしました。そして商人に暇を告げて、泊っている隊商宿に行き、奴隷に命じて、四万金を競売人に渡し、更に手数料として別に一千金を添えました。こうして王子はこの象牙の筒の持ち主

となりました。

ハサン王子はこの貴い品を手に入れると、兄弟たちに対する自分の優位と勝利と、従妹ヌレンナハール獲得を疑ひませんでした。そして悦び勇んで、まだ先に時日もあるので、ベルシア人の風俗習慣を知り、シーラーズの町の名所を見ようと思ひました。そして眺めつつ、聞きつつ、歩きまわつて日々を過ごしました。王子は恵まれた精神と敏感な魂とを持つていたので、教育のある人たちや詩人と交つて、最も美しいベルシアの詩も暗んじました。その上ではじめて、故国に戻る決心をして、一緒に来た同じ隊商が発券するのを幸ひ、一行の商人たちに加つて、旅立ちました。アッラーは王子に安泰を記したまい、事なく、落ち合う先の、三本道の隊商宿に着きました。するとそこには兄のアリ王子がいました。それで兄と一緒に、三番目の弟の帰るのを待つて、そこに止まりました。この王子については以上のようにございませう。

ところで、三人の王子のなかで最年少の、フサイン王子はと申しますると、何とぞ、おお幸多き王様よ、お耳をわたくしのほうにお傾け下さいますように。というのは、次のようございませうすれば。

さして珍らしいことも何ひとつない長旅の末、王子は或る町に着きました。が、聞けばサマルカンドということです。これは実際、即ちただ今わが君の光輝ある弟君シャーマーンのしろしめさるる都、サマルカ

↓古代伝説以来の古都市であるが、実際に建設されたのはアラビヤ人征服の直後七世紀末という。ファルス建国以来最重要の町で、九世紀サッフアール朝の首府。ハーフィズとサアディの二大詩人の誕生地で、郊外に両詩人の廟があるので、今に有名である。

(一) *Bazaar* (ガラン)では *Beestain* とあり、普通名詞に扱う。——アラビア、ベルシアの合成語で、元来は「衣類の市場」の意味であるが、多くの作者は市場 *Bazar* の意味で用いてゐる。(ハートン)

ド・アル・アジャムでございました、「おお当代の王様よ。フサイン王子は到着の翌日から、その国の言葉で「大市場」と言っている、市場に出かけました。そしてこの大市場は大そう美しきと思っていました。王子は自分の両の眼であちこち眺めながら、一心に歩きまわっておりますと、そのとき突然、自分の前二歩のところに、林檎をひとつ持った競売人を見かけました。その林檎は、一方は赤く、他方は金色で、西瓜ほどの大きさがあって、いかにも見事なもので、フサイン王子はすぐにこれを買いたくなり、持っている男に訊ねました、「その林檎はいくらだね、おお競売屋よ。」競売人は言いました、「最初の附け値は、金貨三万ディナールです、おおわが御主人様。けれど、四万で、それも現金でなければ譲るなど、命じられております。」それでフサイン王子は叫びました、「アッラーにかけて、おお男よ、なるほどこの林檎はいかに美しく、私も生れてからついぞこのようなものを見たことはない。しかし、そんな法外な値段を要求するとは、お前はきつとふざけているにちがいない。」すると競売人は答えました、「いえいえ、アッラーにかけて、おおわが殿よ、私の要求するその値段は、この林檎の真価に比べれば、何ものでもございません。それというのは、打ち見たところこれがどんなに美しく見事であろうとも、それはこの匂いに比べれば、何ものでもございません。またその匂いは、おおわが御主人様、いかに快よく好ましいものであろうとも、その靈験に比べれば、これまた何ものでもございません。してまたその靈験は、おおわが頭上の冠よ、おおわが美貌の殿よ、いかにくすしきものであろうとも、人々の幸いのためにここから取り出す効力と用途に比べれば、それは何ものでもないのでございます。」そこでフサイン王子は言いました、「おお競売屋よ、そういう次第ならば、いそぎ私にまずその匂いを嗅がせてくれ。それから、その靈験、用途、効力がどんなものか承わろう。」すると競売人は手を延べて、その林檎を王子の鼻の下に出したので、王子は匂いを吸いました。その匂いはまことに身に沁み入る馥郁とした香でございましたので、王子は叫びました、「やあ、アッラー、わが旅の疲れはすべて忘れた。さながら母の胎

内から今出てきたようだ。ああ、何という得も言えぬ匂いだらう。」競売人は言いました、「それでは、殿よ、お聞き下さい。今この林檎の匂いを嗅ぎなすって、全く思いがけぬ効力を御自身の身に経験なさったからには、申し上げましょう。実はこの林檎は自然のものではなく、人間の手によって作られたものなのです。盲目非情の木に成った果実ではなくて、さる大学者、きわめて高名な哲学者の、研究と不眠の果実なので、そのお方は全生涯を、草木鉱物の効験についての探索と実験に過ごしなされた。そして最後にこの林檎の製作に到達せられたので、この林檎のなかには、あらゆる薬草、あらゆる有用植物、あらゆる薬用鉱物の精髄が、含まれております。事実、ベストでも、猩紅熱でも、癩病でも、おおよそ何なりと何か災厄にかかった大病人で、よしんば瀕死の者なりと、ただこの林檎を嗅いだだけで、直ちに健康を回復しないような者はないのでございます。かつ、あなた様御自身も、旅のお疲れがこの匂いを嗅いで消散したと仰しやるからには、ただ今いささかその効き目を感じなすったわけです。けれども私は、そのことをいっそう確証するため、誰か不治の病にかかった病人を、御目の前で治して御覧に入れ、それによって、現在この町のすべての住人が然るがごとく、あなた様にもこの効験と特性についてお疑いなきように致したいと存じます。現に、ここに集っている商人たちにお訊ねなさりさえすれば、自分たちがまだ生きているのは、ひとえに御覧のこの林檎のお蔭だと、大方の者は申すであります。」

さて、競売人がこのように話している間に、すでに何人かの人が足を停めて、競売人を取りまきながら言うのでした、「そのとおりだ、アッラーにかけて、これは全部本当のことです。この林檎こそは林檎の女王で、薬のなかで随一の妙薬です。もう全く望みのない病人たちでも、死の門から帰らせてくれるのです。」するとちょうどその人たちの言うあらゆる御利益を確かめるかのように、一人のめくらの中風病みの憐れな男が、運搬人の背の上の負籠に乗って、たまたま通りかかりました。競売人は、つとそちらに進み寄って、その鼻の下に林檎をさし出しました。

すると急にその病人は負籠の中で起き上がって、小猫のように運搬人の頭上を乗り越えて飛び下り、両眼を燦火のように見開らいて、脚を風にまかせました。一同それを見て、それを証言しました。

そこでフサイン王子は、この不思議な林檎の効能を今は確信して、競売人に言いました、「おお吉兆の顔よ、どうか私の宿までついでにきてもらいたい。」そして自分の泊っている隊商宿に連れて行って、これに四万ディナールを払い、仲買のお礼として、一千ディナールの財布を与えました。こうして不思議な林檎の持ち主となると、王子は早く自分の国に帰ろうと、どこかの隊商の出発を待ちかねていました。それというのは、この林檎さえあれば、自分はたやすく二人の兄に打ち勝って、ヌレナハール姫の夫になれるだろうと、信じていたからです。そして隊商の用意がととのうと、王子はサマルカンドを出発し、長途の疲れにも拘わらず、アッラーの御許しを得て、二人の兄アリとハサンの待っている三本道の隊商宿に無事着きました。

——ここまで話したとき、シャハラザードは朝の光が射してくるのを見て、つつましく、口をつぐんだ。

### けれども第八十夜になると

彼女は言った。

そこで三人の王子は、大そう情をこめて相擁し、互いに無事な到着を祝し合ってから、一緒に食事をするため坐りました。そして食後、まず長男のアリ王子から口を切って、言いました、「おお弟たちよ、われわれはそれぞれ自分の旅の委細を語り合うには、この先一生あるわけだ。今はまず、われわれの今度の企ての目的でもあり成果でもある持ち帰った珍品を、お互いに見せ合せて、われわれ同士であらかじめ判決を下し、父上帝王がわれわれの従妹ヌレナハール姫について、われわれのうち

誰を特に選びなさるか、およその見当をつけてみることにしようではないか。」

そして王子はしばらく口をつぐんでから、付け加えました、「自分としては、俺は長男だから、まず俺から掘出し物をお前たちに披露してやろう。聞くがよい、俺の旅は、インド海岸のビスシャンガール王国に行ったのだ。そこから俺の持ち帰ったものといえば、ここに今俺の坐っている、普通の羊毛で出来た、一見何の奇もないこの礼拝用の絨氈だけだ。しかし俺はこの絨氈のお蔭で、わが従妹をかち得るつもりなのだ。」そして王子は弟たちに、この飛行の絨氈の由来全部と、その靈験と、またこれを使って瞬く間にビスシャンガール王国から帰って来た次第を、語り聞かせました。そしてわが言葉にいつその重みを加えるために、王子は弟たちに、絨氈の自分のそばへ坐るように頼んで、一瞬の間の空の旅をさせましたが、それはほかの乗物を使ったら、成しとげるのに数箇月もかかるような旅でした。次に付け加えました、「さて今は、お前たちの持ち帰ったものが、果して俺の絨氈に比べることができるかどうか聞かせてもらおうとしよう。」そして王子は、自分の持つ品の卓越さを、このように吹聴し終って、口をつぐみました。

すると今度はハサン王子が口を切って、言いました。

「まことに、おお兄上、この飛行の絨氈は驚くべきもので、私も生れてからこのようなものを見たことがございません。さりながら、いかにそれが感嘆すべきものとはいえ、世には他にも注目し値いする品々があるものだということを、お二人も私と共に、お認めになるでしょう。その証拠には、ここに一見したところ、さして稀代の珍品とも見えない象牙の筒がございます。さりながら、これこそ私に代償を払わせただけのものを払わせたのであり、その見栄えのしない外見にも拘わらず、まことに不思議な品なのです。お二人が、この筒の端の、これなる水晶のあるほうに目をおおてになれば、私の言葉を信するに躊躇なされませぬまい。さあ、私のするように、して御覧なさい。」

そして王子は、左の眼を閉じて、右の眼にその象牙の筒をあてて、言



いました。「おお象牙の筒よ、すぐにヌレンナハール姫を見せてくれよ。」そして水晶を通して覗きました。すると、王子に目を注いでいた二人の兄弟は、王子が突然色を変え、さながら非常な痛心に打たれたように、顔色が黄色くなるのを見て、驚きの極に達しました。そして兄弟が問いたです「暇もなく、王子は叫びました、「アッラーのほかに力は頼りもない。おお兄弟よ、われわれ三人が幸福を期待して、こんな辛い旅を企てたのは無駄でした。あわれ、あと何分かの後には、われわれの従妹はもうこの世にいませんまい。それというのには、今見ると、従妹は病床にあって、涙に暮れる侍女たちと、絶望した宦官たちに囲まれている。なお二人御自身で、従妹の陥っているふびんな有様を御覧になるがよい、おお我らの災厄かな。」こう言つて王子は、心の中で姫を見たいと念じなさいと教えながら、象牙の筒をアリ王子に渡しました。アリ王子は水晶を通して覗きますと、やはり弟と同じように心を痛めて、後しざりしました。するとフサイン王子が兄の手から筒を取つて、同じ悲しい光景を見ました。けれどもこの王子は、兄たちほど心痛した様子を見せるところか、笑いを浮べて言いました、「おお兄上、お眼を爽やかにして魂をお鎮めなさい。それというのは、われわれの従妹の病氣は打ち見たところ非常に重いようであります、それもこれなるこの林檎の靈験には敵し得ますまい。この匂いを嗅いだだけで、死者をもその墓の底から連れ戻すくらいですから。」そして王子は、その林檎の由来とその靈験と、その靈験のあらたかさ、手短かに語つて、これは必ず従妹を治すであらうと、兄上たちに保証しました。

この言葉聞いて、アリ王子は叫びました、「そうとあらば、おお弟よ、われわれは俺の絨緞を使って、大至急我らの御殿に赴きさえすればよい。そしてお前は我らの愛する従妹に、その林檎の救いの靈験を試みよう。」

そこで三人の王子は、自分たちの奴隷に、馬に乗つて後から落ち合うように命じて、暇を出しました。次に三人で絨緞の上に坐つて、ヌレンナハール姫の部屋に運ばれたいと、同じ願いを一緒に念じました。する

と瞬く間に、三人は絨緞に坐つたまま、姫の部屋のまん中に自分を見出したのでございます。

ですから、ヌレンナハールの侍女と宦官たちは、いったいどうやってやって来たのかわからぬのに、突然部屋のまん中に三人の王子を見かけますと、恐れと驚きに襲われました。宦官たちは最初は三人の王子とはわからず、他処の男だと思つて、今にも飛びかかろうとしましたが、そのとき自分たちの見あやまりに気づきました。三人の兄弟はすぐに絨緞の上から立ち上がりました。そしてフサイン王子はいそいで不思議な林檎を置きました。すると姫は両の眼を開らき、その鼻孔の下に不思議な林檎を置きました。あちらこちらに頭をめぐらし、床の上に起き直りいた眼で眺めながら、あちらこちらに頭をめぐらし、床の上に起き直りました。そして従兄たちに微笑みかけ、無事の到着を祝いながら手を与えて接吻させ、旅の様子を訊ねました。兄弟たちは、アッラーのお助けを得て、姫の快癒に力を貸すのちようど間に合つて到着できて、どんなに嬉しいかということを知らせました。すると侍女たちは、王子たちがどんな工合にここに見えたか、フサイン王子がどんな工合に林檎の匂いを吸ひこませて、姫を甦えらせたかを、話しました。ヌレンナハールは一同に、わけてフサイン王子に篤くお礼を述べました。次に、姫は着物を着更えたいというので、従兄たちは姫に長命を祈りつつ、別れを告げて辞めました。

三人兄弟は、従妹を侍女の介抱にまかせて、そのまま父上の帝王の足下に平伏しに行つて、敬意を表しました。すでに宦官から王子たちの到着と姫の快癒の知らせを受けていた帝王は、三人を立ち上げらせ、接吻し、みな慈なく帰つたことを共々に大そうお喜びになりました。こうして一同互いの愛情を吐露し合つて後、三人の王子は、めいめい持ち帰った珍品を、帝王のお目にかけました。そしてそれについて各自父上に御説明すべきことを御説明した上で、御意見を述べた上で、誰を選ぶかお洩らし下さるやうにと、父上にお願ひ申し上げました。